

## 『英語能ハムレット』に感動 Deeply Moved by “Noh Hamlet” in English

磯部 まり  
ISOBE Mari

---

**Abstract:** This is not exactly an essay but parts of my letters I sent to Professor Munakata Ueda, expressing my thanks and impression of and comments on his “Noh Hamlet” One Man Show in English at Bowdon Parish Centre on 19<sup>th</sup> December, 2012. For I was so deeply moved by his lectures in English and Japanese as well as his performance in Shakespeare’s English, especially his unique interpretation of Hamlet and his presentation of it on the stage in the Japanese Noh style. Judging from the atmosphere of the audience watching his movements and hearing his singing of Shakespeare’s lines in Japanese Noh melodies, I felt each spectator of mostly British people had a kind of communion with him who had a strong future-directed attitude to life and the world.

---

**Key words:** “Noh Hamlet”, Munakata Ueda Kuniyoshi.

「能ハムレット」、宗片（上田）邦義

---

昨日、「英語能ハムレット」の講演、パフォーマンス、本当にありがとうございました。大変興味深く、また貴重なお話しをうかがえたこと、有難く思いました。私は、何も知識ありませんが、ただ、先生のおそまでたどりつくまでの道のりは、きっと私が想像だにできないほどの、ご苦労、葛藤があったことと思います。あのパフォーマンスの中にはお能の醍醐味が凝縮されていると思いました。そして、やはり観る側のイメージネーションがどれだけ大切か、痛感しました。もちろん知識は必要なのかもしれませんが、そこにはその観る側の年齢、経験、体験、感性、そして愛の深さであり、演じられる方と観る側との双方でのぶつかり合いだと思います。また、私は能楽師の方々が海外で公演されるのを観まして、どれだけの人たちがこのお能の素晴らしさを分かって頂けるのかと思ったりしていました。でも昨日のパフォーマンスはそれこそが海外の人にも受け入れ、理解できるものではないかと思いました。

先生がここまで完成された「英語能ハムレット」がもっと多くの方々に広まることを願っています。モナコ、カンヌでの講演、パフォーマンスも素晴らしかったことと思います。そしてマンチェスターまでお越しいただきましたこと、本当にありがとうございました。先生のご活躍を祈っています。なぜか、今でも先生のパフォーマンスの一部が脳裏に焼きつき、思い出しております。余韻というものでしょうか。

どんなにすばらしいものでも、それを受け入れるベースがないと、難しいものだと思います。でも先生が演じられた「ハムレット」は、英国人、いや世界中の人たちが知るところであり、

そういう一つのきっかけはとても大切なことのように思いました。あの時の先生のご講演、パフォーマンスはとても私のところに沁み入るものであったことは確かです。つたないものですが、後ほど、再度私の感想を送らせて頂きます。先生のご公演に対しての想いは、観客一人一人が感じたことと思います。それは、先生が演じたときのあの空気を感じとっただけでわかりました。先生のご活躍を願っています。

私は、日本で謡・仕舞を習っていましたこともあり、今回の英語能ハムレットは是非とも観たいと思いました。そして、英語能での演出、構成、謡等、海外の人たちはどのように感じるのか、とても興味がありました。先生のパフォーマンス前のお話しや、演目の事前説明を聞かせて頂き、日本の 伝統文化である能楽を海外、今回の場合英国の方々伝えたいという熱意を非常に 感じました。原文を引用した英語の謡においても、先生の工夫がこらされていたり、本来の日本語の謡の節づかいなどを、上手く英語に置き換えていたところなど、大変感銘いたしました。また、事前に場面の説明、シテ、地謡などの配役、扇などの使い方により表現される感情などを英語で説明することにより、英国人にこのころの内面の変化や魂、霊についての理解が深まったように思います。先生のパフォーマンスを観させていただき、英語能ハムレットにおいても能楽が表現できるという驚きと共に、また観に来られた方々のあの真剣なまなざしを見て、英国人にも能の幽玄さが伝わったと思いました。

私は常々海外の人たちにも日本の伝統芸能である能楽を広めるという事は、何らかの接点、ベースがないとなかなか理解できないように思っていました。私が、こちらに来まして最初に知り合いになった人に、英国文化を代表するものは何かを聞きましたところ、真っ先に「シェークスピア」が挙げられていました。それ故、今回の英語能ハムレットは、多くの英国人が知っている題材であること、また、先生の能楽に対する深い造詣と、幽玄を先生ご自身で工夫されたことにより 英国人にも、能の醍醐味を理解してもらったように思います。このような英語能がもっと多くの人たちに知ってもらえることを祈っております。

最後になりましたが、実は私にとりまして一番ところが打たれましたところは、先生のパフォーマンスのどのシチュエーションの時か忘れましたが、先生が ゆっくりと前の方に足を運び、扇を徐にあげたその瞬間でした。その場面が何とも言えぬ私にとっての感動的な一場面でした。

後日、方邦さんからお聞きしたのですが、その当日に北ウエールズの CONWY 城へ行かれ、その 情景を脳裏に焼き付けて演じられたという事をお聞きしました。私も、あの城に行きましたが、13世紀英国王エドワード一世が築いた城であり、今は城壁だけですが、歴史の重みを感じる城でした。先生は、そこに身をおかれ、何を感じ、何を思われたのか、きっと今までの想いと混じり合い、演じられたのだと思いました。

先生のご講演、パフォーマンスで、観客の一人一人が何かを感じ、何かを思い ある部分で先生と共感したことと思います。それこそが、一番大切な事であるように思います。今回、このような機会に巡り合えましたこと本当にありがとうございます。